

11. 管内交雑種雌肥育農場における牛呼吸器病症候群の発生とその対策

宇佐家畜保健衛生所

○榎園秀平・山岡達也・羽田野昭・吉田周二

【はじめに】

牛呼吸器病症候群（以下BRDC）は、哺乳期子牛を導入する肥育農場においては、大きな経営的損失を与える疾病である。発症での多くは致命的経過を辿り、回復牛でも肺のダメージは出荷まで回復せず、発育や増体に悪影響を与える。今回、管内交雑種雌肥育牛約800頭を飼養する農場において、BRDCにより哺乳子牛が、致死経過を多く招いた事例に遭遇し、関係機関、臨床獣医師の協力のもと、導入子牛への衛生対策に対応したので概要を報告する。

【発生状況および経過】

平成26年11月から哺乳牛が肺炎症状呈し、3頭が死亡した。12月には、同居牛のほとんどが発熱や激しい発咳を伴う呼吸器症状を示し、1頭が死亡したため、臨床獣医師から病性鑑定依頼があった。

【材料および方法】

12月17日に死亡した3カ月齢子牛について剖検を実施し、常法に従い病性鑑定を行った。また、同居牛5頭の鼻腔スワブによりウイルス学的検査、細菌学的検査、薬剤感受性試験とペア血清によるウイルス抗体検査を実施した。

【検査成績】

1. ウィルス学的検査：遺伝子検査では、死亡牛肺より牛ウィルス性下痢ウィルス1型（BVDV1）、鼻腔スワブより牛コロナウィルス（BCV）が4頭と牛ウィルス性下痢ウィルスが1頭検出された。ペア血清による抗体検査では、2頭で牛ウィルス性下痢ウィルス1型と牛パラインフルエンザ3型（PIV-3型）の有意な抗体価の上昇が認められた。
2. 病理組織学的検査：肺は凝固壊死巣が多発性に認められ、肺胞腔内、細気管支腔内に重度繊維素析出と細胞浸潤を観察し、胸膜では重度の水腫と繊維素析出、細胞浸潤が観察された。
3. 細菌学的検査：肺からMannheimia haemolytica、鼻腔スワブ4検体からMycoplasma bovisを、2検体からMannheimia haemolyticaを、3検体からPasteurella multocidaが分離された。

【衛生対策】

導入子牛と哺育子牛の接触を避けるため、導入牛舎を別棟確保し、導入時に5種混合ワクチンの接種と14日間経過観察期間をもうけ、その後哺乳牛舎に移動する二段階ステージで対応し、育成牛舎へ移動時にもワクチン接種するよう変更した。

【まとめ及び考察】

以上から当該農場では、導入・既存子牛の同居環境が呼吸器病の拡大を招き、複合要因がBRDCを誘発し、冬季導入牛26頭が死亡した。さらに抗生剤のみの依存で、有効薬剤が少なく、不安定な移行抗体牛群の反復導入が衛生対策に障害をきたした。BRDCによる事例は多く報告されており、都度周知や対策の啓発に取り組んでいるが、まだ意識啓発を対策実行にまで移行できない農場も少なくない。これからも飼養衛生管理基準の徹底やHACCP方式の導入等を取り入れた衛生対策により、経営安定を図る必要があると考えられた。